



# ハイナイト祈禱課題 2025年3月号

## 1. 人質解放の喜びと悲しみを覚えて

1月19日から始まったハマスとの停戦で、第一段階での解放予定の人質たちが帰還してきました。人質解放は、原則、週末に3人ずつ行われましたが、ハマスは解放直前まで、誰を解放するのか、またその人質たちの生死を明らかにせず、イスラエルの人々を苦しめました。帰ってくる方々が、生きて帰ってくるのか、遺体なのか分からない、極限の緊張と不安、期待と喜びを通過する期間をイスラエル中が過ごしました。そして、2月20日は、テロ以来最も悲しい日の一つとなりました。4人の方々が、遺体で戻ったからです。そのうちの3人は、特に世界中で祈りが捧げられてきたビバス家の母子とされる遺体でした。拉致された時、クフィル君は生後9カ月、アリエル君は4歳でした。母親のシリさんとされる遺体は身元不明で、本人のものではないことが判明。父親のヤルデンさんは、過酷な拘束期間を耐え抜いて解放されましたが、家族との対面がかなわないばかりか、悲しみに追い討ちをかける状況となりました（シリさんの遺体は、翌日返還）。

一方、生還した人質たちは、解放されても、ガザに人質が残されている限り、心はガザに捕らわれたままだと苦悩を告白しています。それは、「今日が人生最後の日かもしれない」と思うほどの過酷な日々を体験してきたからです。拘束場所は、地下トンネル、檻の中、民家、国連施設。長期間一人で置かれ続けた人もいます。トンネルでは、光のない、空気の薄い環境で耐え抜きました。拷問の実態も伝えられています。特に食事は、1日か数日にパン1枚、それが腐ったパンである場合もあり、生存ギリギリの状況であることも分かりま

した。共通して言えるのは、全員が精神的、肉体的虐待を受け、飢餓状態にあったことです。全員が愛する人との再会を希望に生き抜いたのです。

2月8日に解放された3人の男性

は、ナチスの強制収容所から解放された生存者を想起させるほど衰弱していました。エリ・シャラビさんは、ハマスからの引き渡しの時に、こう語りました。「今日、家族や友人、妻や娘たちの元に戻ることができる。とても幸せだ」。しかし数時間後、イスラエルでエリさんを迎えたのは母と姉だけでした。あの日、家の中の避難シェルターに隠れていた妻と2人の娘は、テロリストに火を放たれて焼死していたのです。兄もガザで亡くなり、遺体はハマスに捕らわれたままです。オル・レヴィさんも、妻と息子との再会を切望していましたが、解放後に知ったのは、妻が10月7日に殺害されていたことでした。息子のアルモグ君は、祖父母の家で育てられ、ビデオ電話で再会した時には3歳になっていました。そしてこう言いました。「パパ、帰ってくるのに、ずいぶん時間がかかったね！」

ガザには、まだ残された人たちがいます。解放された方々の癒やしとすべての人質の解放のために、ますます篤い祈りを捧げましょう。



世界中で捧げられた祈りも空しく、遺体で戻ったビバス母子。  
Hostages Families Forum

**「主よ、私は御名を呼びました。穴の深みから。あなたは私の声を聞かれました。私のうめき声に、私の叫びに、耳を閉ざさないでください。」（哀歌3:55～56）**

- ① 解放された人質の方々の心と体が癒やされるように。特に家族を失った方々を主が支えてくださるように。
- ② ガザ拘束中の人質の方々に、主が生きる力と希望を与えてくださるように。
- ③ 人質解放の交渉に臨む国のリーダーたちに主が知恵を与え、一刻も早い全人質の解放が実現するように。

## 2. 日本からのUNRWA支援を覚えて

日本は70年以上、国連パレスチナ難民救済事業機関（通称UNRWA）に多額の支援を行ってき

ました。10月7日のハマスによる大規模テロがあった直後にも、避難民支援として10億円以上

を無償で送金。その後、UNRWA職員のテロ関与が明らかとなり、支援を一時停止したものの、間もなく再開し、昨年、2024年には約54億円を拠出しました。

しかし、UNRWAは数多くの問題を抱えた組織です。イスラエル政府の報道官は1月、記者団に対しこう述べました。「UNRWAはハマスの工作員であふれている。UNRWAに資金提供する国は、テロリストに資金提供していることになる」。報道官によると、UNRWAにいるハマスのメンバーは1200人以上。ハマスは世界中からの支援を強奪していることで知られています。

さらに、UNRWAが運営する学校ではイスラエルを憎む教育を施し、数多くのテロリストを生み

出してきました。こうした問題を受けイスラエルは昨年10月、UNRWAの国内活動を禁止する法案を可決。イスラエル外務省の報道官によると、ガザ地区内での人道支援は、既にUNRWA以外の国連機関、国際NGO、諸外国が行っています。報道官は「その役割は今後さらに拡大していくだろう」と述べました。

UNRWAの支援には、日本の人々の善意が本当に支援を必要としている人々には届かず、テロという悪に利用されているという現実があります。日本の支援が、テロ活動のためではなく、真の意味でガザ市民の祝福のために使われるよう、祈りましょう。

**良い木はみな良い実を結び、悪い木は悪い実を結びます。良い木が悪い実を結ぶことはできず、また、悪い木が良い実を結ぶこともできません。(マタイ7:17~18)**

- ① 日本政府や関係者の目が開かれ、UNRWA支援について適切な判断ができるように。
- ② パレスチナ人が将来自立していけるよう、正しい支援がなされるように。
- ③ UNRWAによる憎悪教育が一掃され、パレスチナ人の心から憎しみが消え去るように。

### 3. ホロコースト生存者への支援を覚えて

1月27日は、アウシュヴィッツ強制収容所の解放を記念する「国際ホロコースト記念日」です。今年の記念日には、ハイファにあるホロコースト生存者が暮らす施設で追悼式典が行われ、BFPはこの施設からパートナーシップをたたえる賞をいただきました。戦争の影響で財政難に陥っていたこの施設に、BFPが特別献金をしたことが評価されたためです。この施設があるハイファは、戦争が始まって以来、ヒズボラからのミサイル攻撃にさらされ、高齢者たちはシェルターに駆け込む日々を送ってきました。

今年は、第二次世界大戦終結から80年目にあたります。現在、世界には約24万5千人のホロコースト生存者がいるとされていますが、うち12~13万人がイスラエルで暮らしています。昨年の調査によると、生存者の半数以上が経済的困難を

抱え、多くの方々が孤独の中にあることが明らかになりました。

BFPは、こうしたホロコースト生存者の方々が尊厳ある晩年を送れるよう、生存者を訪問し、共に時間を過ごしながらか食料をお届けしてきました。また、過ぎ越しや新年などの祭りには、ユダヤ人が大切にしてきた祭りを祝えるよう支援してきました。

ハマスによるテロと戦争が始まって以来、多くの生存者は、幼少期に経験した戦争と迫害の記憶がよみがえり、大きな痛みを抱えています。生存者は、年々減少しており、高齢となったホロコースト生存者への支援は、この時代に託された大切な働きです。計り知れない苦しみを体験した生存者の方々にBFPの支援を通して、主の愛と平安をお届けできるようお祈りください。

**「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——」(イザヤ40:1)**

- ① ホロコースト生存者の方々が、戦争やテロ攻撃から守られるように。
- ② 一人でも多くのホロコースト生存者にBFPが支援の手を伸ばすことができるように。
- ③ BFPの支援を通じて、ホロコースト生存者が主の愛と平安を体験し、喜びに満ちた晩年を過ごせるように。



特定非営利活動法人 **B.F.P. Japan**(ブリッジス・フォー・ピース)

TEL: 03-5969-9656 FAX: 03-5969-9657 URL: [www.bfpj.org](http://www.bfpj.org)

ハイナイトに関するお問い合わせ: [chainight@bfpj.org](mailto:chainight@bfpj.org)